

## 水俣にまなぶ いのちの価値

原田正純 (元熊本学園大学教授)

### はじめに

水俣病とハンセン病とは一見関係ない奇妙な組み合わせのように思われるでしょうが、「病に対する差別」、「弱者切捨て」、「人権無視」などの点で忌まわしいほどの共通点がある。さらに言うならば、両方とも法廷で争われ(裁判になり)、いずれも長期にわたる行政の人権無視、不作為が断罪された点でも共通している。私は約半世紀にわたって水俣病と付き合いしてきた関係上、本日は水俣病の歴史を話したいと思うが、そこに皆さんはハンセン病と水俣病との共通点を必ず見出されると思う。

### 発見から原因究明まで

1956年5月1日に、3歳と5歳の姉妹が伝染病の疑いで水俣保健所に届けられたことによって公式に発見された。発生した場所は、熊本県水俣市の月の浦、湯堂、茂道という漁村地帯に多発していることが明らかになった。最初は、伝染病の疑いということで水俣保健所に届けられた。そのために、“うつる”(伝染する)ということで住民は一時、パニック状態になった。しかし、すぐに、伝染病ではなく魚貝類を食べることが原因であることが分かった。それでも、患者たちは伝染病の隔離病棟に入院させられていたために、住民の不安と恐怖は容易に消えなかった。しかも、現在のようにテレビやマスコミが発達、普及していたわけでもなかった。行政の的確な情報の提供もなかった。そのために、市民たちは恐怖のドン底に落ち込んだ。

一方、原因は水俣湾近くで獲れた魚貝類であることは分かった。しかも、この不知火海を汚染しているものは、東洋一と豪語していたチッソ水俣工場の廃水であることも多くの人々が分かっていた。最新の化学工場であるチッソ水俣工場は、以前から水俣湾に廃水を大量に投棄していたことは誰もが知っていたのである。この不知火海周辺で海を汚染するような工場は、チッソ以外になかったのである。

水俣市医師会、チッソ付属病院、水俣市民病院(現水俣医療センター)、水俣保健所などが協力して患者の調査が行なわれた結果、1953年以来50人以上の患者が発生していたことが明らかになった。しかし、汚染物質が何か分からなかった。

その年(1956年)の8月からは熊本大学医学部が原因究明に本格的に参加していったのだが、最初、医学部は工場内部のことに関しては全くの無知だった。当然のことながら、何を製造しているのか、どのような化学物質を使用しているのか知らなかった。もちろん、チッソが協力すれば内部事情や内容は分かり、原因究明は早かったはずだった。しかし、チッソは原因究明に協力どころか妨害さえした。しかも、行政も原因不明として、何等有効な対策をたてなかった。

翌年(1957年)2月、熊本県は食品衛生法の適用によって漁業の操業禁止を模索したが、厚生省は「原因不明」を理由に法の適用に否定的であった。この時、原因不明を理由にしたのだが、「原因は魚貝類」であることはネコの実験でもあきらかであった。しかし、原因物質

が不明であった。原因と原因物質(病因)とを巧妙に使い分けたのである。

1959年11月になって、熊大研究班は「水俣病の原因はメチル水銀中毒で、チッソ水俣工場が汚染源である」と厚生省に報告して病因が明らかになった。発見から病因究明まで実に3年半もかかったのである。その間、信じられないことだが、人が死に病気で次々と倒れても、チッソも行政も何の有効な対策も立てなかった。そればかりか、「工場廃水を止めよ」と工場の門を壊して押しかけてきた漁民たちを逮捕して裁判にかけた。3人の漁協の組合長が懲役1年(執行猶予付)、55人の漁民がそれぞれ有罪となった。経済成長のためには、漁業被害どころか人の命や健康も軽視された。そうして、工場排水は水俣湾から不知火海へと流され続けるのである。患者や漁民たちの人権は完全に無視されたのである。

公害被害は常に弱者の上に

水俣病発見のきっかけは幼児の患者の多発によってであったことは、すでに述べた。このことは、環境汚染によって人体に被害が及ぶ時、まず最初に被害を受けるのはその環境に住む幼児や老人、病人など生理的弱者であることを物語っている。後にはさらに、胎児がもっとも重大な被害を受けていたことが明らかになるのである。従来の中毒は職業病であったり、誤って食べるなどの事故であったりが主であった。すなわち、いずれも直接中毒であった。しかし、水俣病は環境汚染によって、食物連鎖の中にメチル水銀が取り込まれ、濃縮され、その魚貝類を摂食したヒトやネコなどにおこった有機水銀中毒であった。その点が従来の中毒事件と異なり、環境汚染による全住民の中毒であるという点に特異性がある。それ以前には、“毒は薄めれば毒でなくなる”ことから薄めて捨てれば毒でなくなると希釈放流が勧められてきた。しかし、自然界にはごく薄いものを濃縮するという働きもあったのである。私たちが学生の時は、“希釈放流”というのを習った。すなわち、“毒は薄めれば毒でなくなる”ということだった。しかし、水俣病はそうはならなかったという教訓を残した。

最初、私が水俣病を訪れた時、最もショックを受けたのは、病気の悲惨さよりも貧困と差別に打ちひしがれた患者たちの姿だった。雨戸を閉めて隠れていた。訪れた私たちは、「帰ってくれ」と診察を拒否された。理由は、「折角、世間が水俣病のことを忘れようとしている時に先生たちが来るとまたマスコミが騒ぐ、するとまた魚が売れなくなって皆に迷惑をかける」というのであった。しかし、彼らが一体、何をしたというのだろうか。先祖伝来、目の前の海から恵まれた魚貝類を採って食べただけではないか。それがどうしてあたかも犯罪か何か悪いことをしたように、貧乏のどん底で隠れるように生きていかねばならないのか、若い私には理解を超えていた。

さらに、隠れるようにしている患者たちは、「何遍診てもらっても治らないから、もういい」というのだった。確かに医学は万能でなく、治せない病気は沢山ある。その時、医師はこのような場合に「何ができるか」、「何をすべきか」を患者たちから問われていたと思う。

被害者たちが、一体、何を悪いことをしたというのか。ただ親の代から魚をとって暮らしてきたというだけではないか。このような自然に生き、自然と共に生きている人たちは一般的に言って経済力も権力にも無関係で、どちらかと言えば社会的に弱い立場の人たちであることが

多い。公害といわず、社会の矛盾というか“負”の部分は常に自らの権利すら主張することが苦手な社会的に弱者に集中する事実を示していた。

### 胎児性水俣病

水俣病が公害の原点と言われて世界的に有名になったのは、もちろん悲惨な、大規模な環境汚染事件であったこともあったが、重要なことは工場廃水に含まれた微量の毒物が自然の循環の中で濃縮され人に中毒を起したという特異な発生のメカニズムにあった。今、私たちは食物連鎖と呼んでいるが、要するにヒトも自然の一部であって、自然の循環から逃れることはできない存在であることを、具体的に目に見える形で人類の前に示してくれたのである。自然を汚すことは、天に唾することであることを示してくれた。同時に、私たちは自然によって生かされていることをも示してくれたのである。明治以降、私たちは“自然と闘う”とか、“自然を克服する”とか、自然と対峙する形で自然を見てきた。そして、自然に対する畏敬の念を失って、傲慢になった時、人はその報いを受けねばならなかったのである。

私はある日、水俣病多発地区で縁側で遊ぶ2人の兄弟を見た。2人とも障害をもっていた。しかも、症状はきわめて共通していた。そばの母親に“水俣病ですね”と聞いたところが、“上の子は水俣病ですが、下の子は違う”という意外な返事が返ってきた。“えっ、どうして？”と聞く私は、母親から叱られてしまった。“先生たちがそう言っているのではないですか。この子たちは魚も貝も食べていません。生まれつき(先天性)ですから”と母親は言った。納得しかかった私に母親は、“この子がおなかの中にいるとき魚をたくさん食べました。私が食べた魚の中の水銀がこの子に行ったにちがいないかとです”と言い、“この同じ年に生まれた子がたくさん同じ症状をしています”と付け加えた。この母親の言葉に誘われて調べてみると、驚くべき事実が明らかになった。水俣病多発地帯に、多数の同様の脳性小児麻痺様の患者が多数みられていた。そのことは早くからすでに気付かれていた。しかし、当時の医学的常識では“胎盤は毒物を通さない”というものであった。そして、すでに熊大水俣病研究班はそのことに気付き、調査と実験を始めていたのであった。

私はこれらの患者(17例確認)たちが同じ症状であることを証明して、したがって同一原因による胎児性の疾患であろうと結論づけた。そして、その原因として、発生の場所と時期が水俣病と一致すること、異常に高い発生率であること、家族に水俣病がいること、母親が妊娠中に水俣湾産の魚貝類を多食していること、母親にも軽い水俣病の症状がみられることなどをあげて、胎盤経由のメチル水銀中毒と結論づけた。しかし、それは認められなかった。それが1962年になって、私が診ていた1人の患者が死亡してしまった。その解剖の結果、病理学の武内忠男教授が“胎盤経由のメチル水銀中毒”と診断した。これによって、世界ではじめての胎盤経由のメチル水銀中毒(胎児性水俣病)が確認されたのであった。人類の何万年という歴史の過程で、母親の胎盤は胎児を毒物からしっかり護ってきた。しかし、人類の科学技術は私たちの暮らしを豊かに便利にはしてきたが、同時に未来のいのちを破滅させるような厄介な問題をおこしてしまった。胎児性水俣病は、人類の未来に対する重大な警告であった。その後、カネミ油症事件(PCB)、サリドマイド事件など次々と胎盤経由の

中毒事件がおこった。現在のダイオキシン、環境ホルモン(外因性内分泌阻害物質)などの問題はこの時すでに始まっていたのである。

#### 世界の各地で

環境汚染は地球的規模で深刻化している。たとえば、水銀問題に限ってみても、その教訓は活かされていないといわざるをえない。世界の各地で今なお、水銀汚染が進行している。カナダでは、1970年代にパルプ工場の付属の苛性ソーダ工場が流した水銀汚染が問題化した。その問題は、まだ未解決な部分が残されている。1970年から私たちは臨床的、疫学的調査を続けている。当時、頭髮水銀値は50 ppmを超えていたし、感覚障害、視野狭窄などの症状を確認していた。カナダ政府は水俣病の発生を公式には認めていないが、福祉の立場からといって補償金を支払っている。水俣病の発生は否定しているものの、その認定基準は日本の水俣病の完全なコピーであった。被害者はカナダ先住民であった。調査に行った私たちに酋長は、「父なる太陽の恵み、大地を流れる水は母の乳である。先祖はその恵みを受けていのちを育めと言ってきた。その母の乳を汚した白人はいずれみんな滅びるだろう」と言った。ここでも、公害がおこる背景には差別の構造があることがあきらかであった。先住民たちは、生き物を殺すということはいのちをいただく、生きるためにのみ殺してきた。あらゆる生き物には先祖の魂が宿っていると信じているのである。しかし、白人は毛皮のために大量の動物を殺したし、遊び(レジャー)のために生きものを殺しておるといふ。先住民の文化、生活習慣は否定され、リザーベーションという土地に囲われて、白人文化への同化政策が採られている。まさに差別のあるところに公害が集中するのであった。

ブラジルのアマゾン川流域でも、水銀汚染がおこっている。上流で、流民とも言うべき流れの労働者が一攫千金を夢見て金を探しまわっている。その際、水銀を使って金をとっているのだが、その水銀がアマゾン水系を汚染している。河川を汚染するばかりでなく、採金労働者(ガリンペイロ)は無機水銀中毒で健康を蝕まれている。彼らの労働現場は、目を覆うばかりの劣悪な環境であった。一体、どれ位の労働者が入り込んでいるのか、その数さえわからない。それも重要な問題であるが、その際、飛ばした(捨てた)水銀は環境の中でメチル化して魚の中に蓄積される。その結果、魚の中の水銀値が上昇している。当然、それを常食としている漁民たちが水銀に汚染されている。その証拠に、彼らの頭髮値はすでに安全基準を上回る。軽いが、すでに若干の神経症状を確認することが出来た。しかし、行政からは何の対策も聞き出せなかった。漁民たちは言った。「魚を食べないと生きていけない。行くところもない。日本は科学が進んでいるから、魚を食べても水俣病にならない薬を送ってください」と。

#### いのちの価値

水俣病の発見の契機をつくったあの姉妹のうち姉は早く亡くなったが、発病当時3歳だった実子さんは今も自宅で静養している。すでに両親は亡くなり、他所に嫁いでいた姉さんが介護している。もし、水俣病にならなかつたら今頃は孫でも抱いていたに違いない。しかし、

彼女は発病以来、今日まで一言も話すことができない。食事、用便、全て介助が必要な状態である。毎日、海を眺めては体を揺すり、手を擦りすわっている。それでも彼女が生きていることは大きな意味がある。水俣病問題がそれだけでも決して終わっていないことを示している。

胎児性水俣病の智子さんは、生まれて23年間の短いいのちだった。その間、「お母さん」の一言もものを言わなかったが、ユージン・スミスの写真によってその子の存在が世界中に環境問題の重要性といのちの大切さを示し続けてくれた。智子さんは一言も喋らなかったが、多くの人々が未来のいのちを護らなければならないと決意した。そして、お母さんは智子さんを「宝子」と呼んで慈しんだ。「智子はものを言いませんけど、この姿を見た世界中の人が環境の大切さを分かってくれらすなら、この子は宝です。そして、もの言わん姉を見て育った弟や妹たちが自分のことは自分です、お互いに助け合う優しい子どもたちに育ててくれました。これも智子のおかげです」と言って、片時も腕の中から離そうとしなかった。智子さんは一言も話しませんでした。無数のメッセージを発信し続けた。私たちは智子さんとその母親からいのちの価値を学んだ。この世に生きる価値のないいのちはないと。

#### 参考文献

- 1) 熊本大学医学部水俣病研究班：水俣病、有機水銀中毒に関する研究、熊本大学医学部水俣病研究班刊、1966年3月。
- 2) 原田正純：水俣病、岩波書店、1972年。
- 3) 原田正純：水俣地区に集団発生した先天性・外因性精神薄弱 母胎内で起った有機水銀による神経精神障害“先天性水俣病”、精神神経誌、66:429 - 468, 1964.
- 4) 原田正純：現在の水俣病の問題点、その背景と歴史、公害研究、6(3)、49 - 60, 1977.
- 5) 原田正純、花田昌宣、宮北隆志、藤野紘、鶴田和仁、福原明、大類義、中地重晴、荒木千史、田尻雅美、永野いつ香：長期経過後のカナダ先住民地区における水銀汚染の影響調査(1975 - 2004)、環境と公害、34(4)、2 - 8, 2004.
- 6) 原田正純、中西準子、小沼普、大野浩一、赤木洋勝：ブラジル、アマゾン水域の採金による水銀汚染調査、公衆衛生、59(5)、307 - 311, 1995.
- 7) 原田正純：水俣が映す世界、日本評論社、1989.
- 8) 原田正純：水俣への回帰、日本評論社、2007.
- 9) 原田正純：人類史に及ぼした水俣病の教訓、水俣学序説、「生命と環境の共鳴」(高橋隆雄編)、p151 - 185、九州大学出版会、2004.